

# 「自然」写真の人類学

## — 北海道における野生鳥獣の撮影現場を事例に —

中村香音

キーワード：自然写真、野生鳥獣、撮影現場、絡まり合い、北海道

### 要旨

本論文の目的は、野生鳥獣の撮影現場に参加し、野生鳥獣を撮る現場、また撮影という出来事がどのようにして作り上げられているのかを諸存在の関係や絡まり合いを通して考察することである。また、「撮る（＝人間）・撮られる（＝野生鳥獣）」の二者間の関係性を問い直すことを目指している。

序章では、日本における写真文化の現状と、野生鳥獣を撮影する人々の実践について説明し、研究の背景と目的を提示した。

1章では、自然写真の定義と自然写真のこれまでの展開を確認した。また、自然写真（家）を取り上げたオオハラ（2019）と吉成（2021）による先行研究をレビューし、本論文の独自性を示した。

2章では、本論文を文化人類学における「自然/人間」の二元論を再考する存在論的転回以降の人類学の中に位置付けることで、その学術的意義を示した。特に脱人間中心主義を目指すマルチスピーシーズ民族誌/人類学の観点に立つことで、諸存在の絡まり合いに着目した。また、人間の視点ではなく「ネコの視点」に立つことの重要性を語る動物写真家・岩合光昭氏の写真撮影を脱人間中心主義の人類学に位置付けて論じた山口（2019）と奥野（2022）の論稿をレビューした。

3章では、調査方法とその調査範囲を説明し、分析方法を述べた。本論文の調査方法は主に参与観察に基づくフィールドワークと、展示の実践で行ったインタビュー（半構造化インタビュー）やインフォーマル・インタビューとした。フィールドワークではアマチュアカメラマン X 氏と自然写真家の高橋忠照氏の二名の研究協力者の撮影にそれぞれ同行し、撮影現場の調査を行った。調査地は彼らが日常的に撮影を行っている場所とし、X 氏に同行した際は野生鳥獣を撮影する人々がよく訪れる円山・円山公園や真駒内公園を、高橋氏に同行した際は美瑛町や上富良野町周辺の人気のない場所を訪れた。

調査に赴く際には、筆者自身もカメラを持ち、撮影者が被写体とする野生鳥獣と一緒に  
なって撮影する方法を採用した。なお、撮影現場に関与する撮影者の人数によって撮影  
の状況がいかに異なるのかを分析するために、1 個体の被写体に対して複数の撮影者が  
同時に集まって撮影していたケースと、撮影者と被写体が 1 対 1 の図式で撮影する高橋  
氏の撮影を比較することにした。高橋氏の撮影に関しては、インタビューからその現場  
の状況がどのようなものであるかを確認することにした。

4 章では、フィールドワークで得たデータを通して、筆者自身の撮影体験を踏まえなが  
ら実際の野生鳥獣の撮影現場の状況を説明した。1 個体の被写体（野生鳥獣）に対し  
て複数の撮影者が同時にカメラを向けて撮影が行われる事例として、X 氏の撮影に同行  
した際に出会ったクマゲラを撮影する現場（事例 1）と、高橋氏の撮影に同行した際に  
出会ったエゾリスを撮影する現場（事例 2）を取り上げた。

5 章では、野生鳥獣と撮影者が 1 対 1 で対峙する高橋氏の撮影を取り上げた。筆者が  
企画を行った展示『「深」動物撮影 関係論』では、高橋氏が単独で撮影した 5 点の作品  
を扱い、各作品がどのようにして撮影されたのかという撮影エピソードを記したキャプ  
ション制作を行った。この章ではキャプション制作時に行ったインタビューを通して、  
各作品の裏舞台を提示し、その中で見られる高橋氏の撮影の特徴を整理した。

6 章では、高橋氏が野生鳥獣にアプローチで留意していることを説明した。高橋氏が  
野生鳥獣に接近するとき、野生鳥獣には個体差があることを前提とし、被写体の特徴に  
合わせた「適切な距離」を取ることで、その距離に合わせた接近やレンズの取捨選択が  
行われていたことを確認した。また、被写体への接近は、野生鳥獣が逃げることで  
できる環境下であることが条件となっていた。

7 章では、4 章から 6 章までの調査内容をもとに、撮影現場における諸存在がどのよ  
うに関係しているのかについての分析と考察を行った。はじめに、円山におけるクマゲ  
ラの撮影現場を通して撮影者同士の関係性を考察した。その後、撮影現場の諸存在の関  
係に着目することの重要性を示すために、撮影現場に関与する撮影者の人数に注目しな  
がら撮影現場の状況にどのような違いが現れるのかを分析した。最後に、ティム・イン  
ゴールド（2011）による「生命」に関する存在の関係論の視座を通して、撮影現場に関与  
する諸存在の「絡まり合い」とはどのようにして描けるのかを考察した。その上で、「撮  
る（＝人間）・撮られる（＝野生鳥獣）」という二者間の関係性の問い直しを検討した。

終章では、以上の章のまとめを行い、今後の研究課題を示した。